

# 日本婦道記

不斷草

山本周五郎

青空文庫



「ちようど豆腐をかためるようにです」

良人おっとの声でそう云うのが聞えた。

「豆を碾ひいてながしただけでは、ただどろどろした渾こんとん沌たる豆汁まめじるです、つかみようがありません、しかしそこへにがりをおとすと豆腐になる精分だけが寄り集まる、はつきりとかたちをつくるのです、豆腐になるべき物とそうでない物とはつきり別れるのです」

「ではどうしてもにがりは必要なのだな」

それはお邸よいちの与市さまの声だった。

「そうです、でなければ豆腐というかたちは出来あがりません」

良人も与市さまもひどくまじめくさった調子だった。菊枝きくえはその部分だけ聞いたのだが、なんのために豆腐のかため方などを話しあっているのかわからず、「男の方たちはとぎによると子供のようなことに興おきがるものだ」とよく云われているのを思いだし、つい可笑おかしくなつて独りでそつと笑っていた。それで良人の呼んでいるこえに気づかず、三度めのは

げしい高声でおどろいて座を立った。

「茶を代えぬか、なにをしているんだ」

三郎兵衛さぶらへえはいきなりどなりつけた、棘とげとげ々々しい刺すような調子だった、そしてまるで人が違つたような意地の悪い眼だった、菊枝はあまりの思いがけなさにかつと頭へ血がのぼり、おそろしきで危うくそこへ竦すくんでしまふところだった。

それが最初のことだった、嫁して百五十日あまり、口数の少ない、しずかなひとだと信じていた良人なのに、それから眼にみえて変りだした。言葉つきは切り口上になり、態度は冷たくよそよそしいものになった、どんな小さな過失もみのがさず棘のある調子で叱りつけた、そして姑しゅうとめまでがしばしば、

「もう少し気をはたらかせないといけませんね、こんな小人数の家でそれでは困りますよ、もつとしつかりしなければね」

そう云つてたしなめるのだった。姑は両眼が不自由だった、それもとし老いてからの失明で、勤が悪く、起きるから寝るまでいろいろと菊枝の介添が必要だった。気のやさしい、おもい遣やりのあるひとではあつたけれど、三郎兵衛のことになるとまるで菊枝に同情がなくなつた。——そうだ、もつとしつかりしなければ。菊枝はそう心をひきしめ、過失をし

ないように、できるだけ良人や姑の気にいるようにとつとめた。しかしそういう緊張しすぎた気持はかえって過失をしやすいものである、良人の小言は多くなるばかりだったし、菊枝は神経が昂たかぶって眠れない幾夜かを明かすようになった。

春になってからの或る夜、九時すぎてからのことだったが、三郎兵衛は急に酒をのむと云いだし、家に無ければ買って来いと命じた。武家の妻として夜酒を買いにゆくなどということは恥ずかしいし、時刻も時刻なので菊枝はちよつと立てなかつた、すると三郎兵衛はびつくりするような高声でどなりつけた、

「なにをうろうろしているんだ、寝ていたら起こして買え、すぐ行って来い」

あまりのはげしさに菊枝はなかば夢中で良人の部屋をはしり出た、呼吸が苦しく、膝ひざがしらがおののいた、けれどそのまま厨くりやへゆこうとすると姑の呼びとめる声でしたので、心せきながらたち戻ふすまつて襖ふすまをあけた。

「茨木屋いばらきやの店は下の辻つじにあります」

姑はあちらを向いたままそう云つた、

「お酒くらいはもうつねづね用意して置かぬといけませんね、こんな時刻になって買いに出るのは恥ずかしいことですよ」

はいといつて頭をさげると涙がこぼれそうになった、菊枝は口のなかで詫びながら気もそぞろに厨口から出ていった。……春とはいつてもまだ二月はじめの夜はひどく凍ていた、米沢はまわりを山にかこまれていて冬がながい、城下町には汚なく溶けのこった残雪があり、昼はむやみにぬかる道が、夜になるとそのまま氷るので、うっかりあるくと踏み返して足を痛める、菊枝は気もあがっていたし、馴れぬ夜道ではげしく躓き、蹠のころを捻挫した。突き刺すようなすんどい痛みに、思わず氷った地面へ膝をついたとき、その痛みといつしよに日頃のがまんがきれ、身も世もなく悲しくなつて泣きだしてしまった。仲人の蜂屋伊兵衛が来はじめたのはそれから間もなくのことだった。良人のほうから訪ねるようすだった、三度めかに来たとき、伊兵衛は菊枝をそつと呼んで、「どうやらすえ遂げぬ縁のようだ、そのつもりでいるほうがよいぞ」と囁いていった、菊枝はまつ蒼になつて身をふるわせていた。

## 二

菊枝の父は上杉家の三十人頭で、仲沢庄太夫といい、すでに隠居して長男門十郎に跡

目をゆずつていた。菊枝は登野村とのむら三郎兵衛から蜂屋をとおして望まれた縁であった。登野村は五十騎組から出た家からで、食しょくろく禄も少なく貧しくもあつたが、執政しつせいの千坂ちぎかつしま対馬にみとめられ、その奉行所でかなり重い役目を勤めていた。酒も嗜たしなまず、温和で頭のよい将来を囁しよくぼう望ぼうされている人物だつたから、父も兄ものりきで縁組をしたのであつた。そういうわけなので、まだ嫁して半年そこそこの離縁ばなしは仲沢家の者をひどく怒らせた、菊枝の氣づかぬところで幾たびも折衝があつたらしい、けれどもついに離縁ときまつた。

「わたくし実家へはもどりません」

菊枝は泣きながら訴えた、

「どのようにも足らぬところは直します、きつと御家風に合うようにつとめます、どうでも去ると仰おつしやるのでしたらもう暫く、せめてもうひと月でもお置き下さいまし、わたくしきつとお氣に召すようにいたしますから」

良人は見向きもしなかつた、姑もとりなしては呉くれなかつた。ずっと後になつてからもそのときの絶望を思いかえすごとに、よくもあのととき自害せずにはいられたものだど、自分で菊枝はぞつとする感じだつた。實際は死ぬつもりだつた、けれども「父上のおなげきを思え」と兄に云われたし、自分が死んでは登野村と仲沢家のあいだに救いようのない間違

いがおこりそうに思えた。自分の面目は立つても、両家に禍を及ぼすのは道ではない、そう思案して菊枝は泣く泣く実家へもどった。

花のたよりも、若葉の眺めも菊枝にはかかわりなく過ぎていった。母親は亡かったけれど、兄に美代みよという妻があつて、家事はすべて嫂あによめに任されていたから、菊枝は自分のことを始末すればほかに用はなかつた。

「ご苦労をなすつたのですもの、少しはのんびりと御保養をなさいますし」

嫂は事ごとにそういたわつて呉れた、父も兄もつとめて気をひきたてるように話しかけ、どうかして早く傷心を忘れさせようとする心くぼりが哀かなしいほどありありとみえた。梅雨のあがつた或る日、持つて帰つたまま手もつけずにあつた荷を少しづつ片付けはじめると、思わぬところから種子袋たねが出てきた。……なんの種子だったかしら、菊枝はその小さな黒い粒子を掌てのひらにころばしてみながらしばらく考えていたが、やがて唐苳とうちぎだということをお思いだした。

「そうそう姑ははうえ 上さまの御好物だった」

唐苳は不断草ふだんそうともいって、時なしに蒔まき、いつでも柔らかい香気のある葉が採とれる、登野村の姑がなによりの好物で、——これだけは絶やさないようにしてお呉れ。と云い云



いしたのである。

「たいそうお好きだったけれど、いまでは誰があの島の世話はたけをしているかしら」眼が不自  
由で勘の悪い姑のことが思い遣られ、菊枝はつい声をしのんで噎むせびあげた。——良人はわ  
たくしを望んで下すつた。それなのに半年あまりの縁で去られたのはなぜだろう。わたく  
しがふつつか者で気がうとかつたせいかしら、あのようあに急にお気性きせうが変つたのも、ただ  
わたくしがお気に召さなかつたためかしら、それともほかにわけがあるのだろうか。思い  
だすと絶望が迫つてきた。「自分がふつつかなのだ」と諦あきらめながら、けれどできるだけの  
努力をして酬むかわれなかつた数々の事実が記憶にうかび、もう人も世もわからないという気  
がして、片付けていた物を投げだして泣き伏してしまった。

すつかり夏になつて照りつける日が続いた。その夜はひどく蒸して蚊が多かつたので、  
菊枝はそつと庭へ出て夜気をいれていた。まわりは萩はぎの茂みで、その向うに父の居間がみ  
え、話しごえがしていた。——そうだ、蜂屋さまが来ていらした。そう思いながら、聞  
くともなしに惘もうぜん然ぜんとしていると、「登野村」というのが耳についた、菊枝はどきつとし  
て耳を澄ました。

「つねづね千坂どの腹心の男だからおそらく唯では済まぬでしょう、いま考えると離縁し

たことはかえって幸いでした」

「幸いと申しては悪いが、やっぱりそうだったのかな、少しようすが落ち着かぬとは思っていたのだが」

「唯では済みません」

伊兵衛がしきりに強調した、

「これは相当に思いきった処置があります、きつと離縁してよかつたと思ひ当るときがきますよ」

菊枝にはなんのことかわからなかつた、しかしなにか重大なことが起こつたらしい、そして登野村にもその累が及んでみるとみえる、いったいなにごとかしらんと菊枝はにわかには心がさわぎだした。……真相は間もなくはつきりした、それは執政千坂対馬はじめ、色いろ部べ修理り、須田伊豆すだいず、長屋兵庫ながやひょうご、清野きよの、芋川いもかわ、平林ひらばやしという七人の重臣れんべいが連袂れんべいして御しゆくん治憲はるのりを強要したという事件であつた。

上杉家の若き主君、弾正大弼治憲は高鍋藩秋月家の二男に生まれ、十歳のおり上杉家へ養子にはいった。ひじょうに英明の質で、家督を継ぐとともに重役のうちから竹俣美作、莅戸善政のふたりを抜擢し、かなり思いきった藩政の改革をはじめた。ところが重臣たちの中にその改革をこころよからず思う者がいて、とかく家中に円満を欠くところが多かった。その人々が五十カ条に余る訴状を持って治憲にせまり、竹俣、莅戸一統の罷免と、政治復旧とを強要したのである。重臣が七人そろつてのことだし、治憲はまだ若く、一時はどうなることかと危ぶまれたが、果斷よく機先を制して七重臣を抑え、ついに大事にいたらずして鎮めることができた。

菊枝がすべてを知つたのはかれらの罪科がきまつてからだつた。千坂対馬と色部修理は知行半減、隠居閉門。須田伊豆、芋川延親は切腹。その他の三人は閉門のうえに三百石召上げということである。そして事に坐して退身した人々の中に登野村三郎兵衛もいた。「かれはみずから扶持を返上して退身したそうだ」

兄の門十郎が話して呉れた。

「なんでも館山の二十軒にしるべの農家があるそうで、老母をそこへ預け、自分はすぐに退国するというはなしだ、……いまにして思えば、不縁になつたのは不幸中の幸いだつ

たな」

菊枝は黙つて聞いているうちに、なぜともなく登野村にいた時の或る日のことを思いだした。

「豆腐をかためるにはにがりが必要だ」と云つた良人の言葉である、そのときは千坂対馬の子よいちきよたか与市清高が客に来ていた。二人でながいあいだ話しているうちに、そういう部分だけきこえた、菊枝はわけがわからず、ただ可笑しく思つただけであつたが、いまふとそれを思いだすと同時に、なにかしら強く胸をうつものが感じられた。にがりをいれると、豆腐になるべき物とそうでない物とはつきり別れる。良人はそう云つた、理由はわからなけれど、それはどうやらこんどの事件にかかわりをもつ言葉のように思える。菊枝はにわかには胸苦しくなりだした、どんな意味なのだろう、良人はなにを云おうとしたのだろう。——そうだ、良人のようすが変りはじめたのもあの頃からだった、もしや……。もしや良人はこんどの事件の起こることを知り、その結果を知っているために、そして妻にその累を及ぼしたくないために離縁したのではないだろうか、そう考えると思い当ることが多い。そうだ、それに違いない、菊枝はそう思うとともに、自分は登野村を出るべきではなかつたと気づいた。

その夜、父の前へ出た菊枝は、これから登野村の老母のもとへゆきたいと云いだした。

「わたくし尼になるつもりでおりました。けれど尼になったつもりで御老母のゆくすえをおみとり申したいと存じます」

父がおどろくより先に怒ったことはその眼の色でわかった。菊枝は決心のかたさを示すように、父のその眼をがっちりと受けとめた。

「おまえには」

と父はきめつけるように云った。

「そうすることが仲沢の家名にどうひびくかわかるか」

「わたくしは一旦この家から出た者でございます、尼になるか、世にたよらない御老母をみとるか、いずれにしてもやがてはこの家を出てまいらなければならぬからだです、父上さま、おゆるし下さいまし」

「ならぬと申したらどうする」

菊枝はさつと蒼あおざめた、そして苦しそうに眼をふせながら、きつぱりと答えた。

「わたくし義絶いただをして戴いたきます」

父の拳こぶしが膝の上でぶるぶると震えるのを、菊枝はやつと自分を支えながら見まもつてい

た。

菊枝は父から勘当された、そしてわずかな着替えの包みを持ち、或る日たったひとりですずかに家を出ていった。……たずねるさきはすぐにわかった。城下町から南にあたる丘つづきで、その家は二十軒と呼ばれる村の名主だった。その家のあるじはながさわいちぢえもん長沢市左衛門なといつて、登野村とは遠い縁家になっていた。田地山林も多く持っているし、広い屋敷のなかには二た棟の機屋があり、人を使ってかなり盛んに米沢織を出していた。

菊枝はあるじに会った、包まずにすっかり事情をはなし、老母のみとりをさせて貰いたいとたのんだ、

「でも不縁になったわたくしということがわかりましたら、姑上さまはきつと御承知なさらないと存じます、菊枝だということは内密にして、どうぞよろしくおたのみ申します」

「あなたはこの老人をお泣かせなさる」

市左衛門は本当に眼がしらを拭いた。

「よろしゅうございます。お願い申すのはこちらでございませう、どうか面倒をみてあげて下さいまし、必ずあなただということの知れぬように致しますから」

「ああ、これで生きる道ができました」有難う存じますと云つて、菊枝もそつと眼を押し

ぬぐった。

#### 四

登野村の老母は別棟になつてゐる隠居所にいた。前には母屋へつづく庭がひらけ、うしろはずつと松林だつた、厨にはその松林を通して引いた笥かけいから、絶えず清冽せいれつな水がせんせんと溢れてゐた。……市左衛門にもなわれて隠居所へいったとき、姑は座敷の端に坐つてひとり団扇うちわを動かしてゐた、菊枝はその孤独な、寂しい姿をみるなり、ぐつと熱いものがこみあげてくるのを、抑えかねた。

「ようやくおまえさまのお世話をして呉れる者がみつかりました」

市左衛門はそう云いながら菊枝を促して座へあがった、

「この屋代やししろの者で名はお秋といひます、親やしきようだいのないひとり身で氣のどくな娘ですから。どうかおめをかけてやつて下さいまし」

「それはそれはおかわいそうな」

姑はこちらへ膝を向け、かいさぐるような表情をみせながら云つた、

「わたしもこのとおり眼の不自由なからだです、いろいろ面倒であろうがどうかよろしく  
お願いしますよ」

「もつたいない仰せでございます、秋と申しますふつつか者、どうぞおたのみ申します」  
気づかれてはならぬと思い、つぶやくような声でそう云いながら、菊枝は濡縁へぴつた  
りと額をすりつけた、市左衛門はそばで眼をうるませながらしきりに頷うなずいていた。

あくる朝はやく、まだうす暗いうちに起き出た菊枝は、隠居所の横にひらけている畠あきもや  
隅へいつて、持つて来た唐苳の種子を蒔まきつけた。畠地のうしろの松林に濃い朝靄あきもやが  
りていて、その樹の間をしきりに小鳥が啼なきながら飛び移っていた、頬白であろう、よく  
徹る美しい音色がきんきんと林へこだまし、笥かきをはしる水の囁ささきと和して、どんな山奥へ  
来たかと思われるほど閑寂たる気持にさそわれた。菊枝は蒔まきつけた種子に心をこめて祈  
った、「どうぞ一粒でもよいから芽をだしてお呉れ、おまえが芽生えたら、わたしが姑おばさ  
まのおそばにいられる証あかしだと思ひます」そしてかの女の新しい生活がはじまった。

大きな不幸にあつたためか、姑はまえよりも勘がにぶくなっているように思えた、食事  
こそどうにかひとりで済ませるけれど、そのほか立ち居につけ起き臥ふしにつけ、夜半にさ  
えも菊枝の介添えがなければ用のたらぬことが多かった。なによりも案じたのは、自分だ



ということを感じられることだったが、そのためかしてどうやらその心配もなく、お秋どの、お秋どのと気やすく呼びかけるし、こちらのすることは、なんでもよろこんで肯きいて呉れた。これならもう大丈夫であろう、そう思いはじめたある日、かの女は畠の隅で唐苳の芽ぶいたのをみつけた、「ああやっぱりおもいがとおった」そう思うと同時に熱いものがこみあげ、かなしいほどのよろこびで胸がいつぱいになった。ほとんどぜんぶの種子が芽生えたとみえ、小さな柔らかいあさみどりの嫩ふたばが、びっしりと土の面を埋めている、

「ひとつも枯らさずに育てよう」菊枝はそう誓いながら唐苳の根をおろしたように自分のいのちもこれで此処ここに根をおろしたと思つた。昏くれがたのかなしげな蝸ひぐらしぜみの声を聞きとめて、「ああもう秋だ」とおもつたが、それからどれほど経たぬのに、夏のうちは見えなかつた林のなかの、松の幹にからみついていた蔦つたかずらの葉が、燃えるように紅葉もみじしはじめ、夜更よふけの空をわたる風の音もいつかしら寒ざむとして、ま近に来てゐる冬を思わせる日々となつた。

そうしたある夜のこと、菊枝ははじめて唐苳を採つて食しよく膳ぜんにのぼせてみた。姑はひと箸はしでそれと気づいたらしい、いつもは表情のない顔がにわかひきしまり、ふと手をやすめてじつと遠くの物音を聴きすますような姿勢をした。菊枝はどきつと胸をつかれた、

姑のそのような姿勢はかつてないことだった、

「気づかれたのではないか」とおもった。

しかし、やがて姑はしづかなこえで云った。

「これは唐苜ですな」

「……はい」

「これは不断草ともいうそうで、わたしのなによりの好物ですよ、不断草とはよい名ではないか。断つたときなし、いつでもあるというのですな、不断草……ずいぶん久方ぶりでした」

「お気に召しましてうれしゅう存じます」

菊枝はほつと息をつきながら云った、

「柔らかい葉でございますから御隠居さまにはおよろしかろうとおもいまして、種子を持つてまいりました、土がよく合いましたとみえてたくさん生えておりますから、……でも雪にはどうでございましょうか」

「冬のうちに藁わらでかこえば大丈夫ではあるうが、陽だまりへ移してやるがいいでしょうね」  
そう云いながらも、姑はいかにも好物をたのしむように、舌の上でまろばせては唐苜を

味わいつづけていた。その夜ずいぶん更けてから、松林の奥のほうでしきりに狐のなくこえがしていた。

ある夜ひと夜、嵐がすさまじく吹きあれて去った朝あけ、家のまわりは散り敷いた落葉でいっぱいになっていた、色もかたちもさまざまだし、手にとると眼もさめるような美しい葉がたくさんにあった。あまりのみごとさに、熊手を持ったまま立ちつくしていると、「早くから精がでますな」と云いながら市左衛門が近づいて来た。

## 五

御老母にお届け物があつて、そういつて市左衛門が隠居所へとおつたあと、菊枝が庭さきの落葉を掻かいていると、

「ちよつとここへ来てお呉れ」

と姑の呼ぶこえがした。かの女はすぐに手を洗っていった、庭を出てゆく市左衛門のうしろ姿をちらと見ながら座敷へいつてみると姑は一通の封書をまえに置いて待っていた。

「この手紙を読んで頂こうと思つて……」

「はい」

「いま市左衛門どのが届けて下さったのです、せがれから来た文ふみです」

老母はそう云つてしずかに封書を押してよこした。菊枝はさつと蒼あおくなった、良人の文である、なにもものにも代えがたいただひとりの良人の書いた文である、なつかしいとも、かなしいとも、言葉では云いあらわしがたい感動が胸へつきあげ、とりあげようとしてさしだした手指はぶるぶると震えた。「……どうおしだ」姑がもどかしそうに云つた。「はい、ただいま」菊枝はけんめいに自分を抑えながら、震える手でようやくとりあげて封を切つた。

その手紙は越えちぜん前から出されたものだった。菊枝はまったく夢中で読んだ、なにが書いてあつたかほとんど理解することができなかつた。拭いても拭いても溢れ出てくる泪、ともすれば喉のどをふさぎそうな嗚咽おえつ、それを姑にさとられずに読もうとするだけで精いっぱいだった。姑も袖で眼を押えながら聞いていた、そして読み終つたあとも、しばらくわが子のおもかげを追うようにじつと息をひそめていたが、やがて眼を押しぬぐいながら、

「またあとで、ときどき読みかえして貰いましょう、その仏壇に供えて置いて下さい」とそう云つた。菊枝は云われたとおりにしたが、仏壇へあげるともうすぐから自分ひと

りで読みかえたいというはげしい欲求にとりつかれてしまった。なにもわからずに夢中で読みすごした文字のあとを、もういちどはつきりとたどってみたい、そこには良人の息<sup>い</sup>吹<sup>ぶ</sup>きがある、良人の呼びかける声がある、なにかしら自分に關したことも書いてあつたような気さえする。部屋のでいりにもすぐ眼は仏壇へひきつけられた、夜半にめぎめていまこそと思うこともたびたびだつた、——せめて姑上さまがもういちど読めと仰しやつて下さつたら、そうねがいもした、けれど老母はそれきり手紙についてはなにも云わなかつたし、菊枝にもついにぬすみ読みをする決心はつかずにしまった。

その年が暮れて明けると間もなく菊枝は昼のうちだけこの家の機場へ織り子に出ることになつた。藩主上杉治憲の新しい政治が農産業の増進を主としていたし、機業はそのなかでも重要なひとつだつたから、姑も御政治のごしゆいにかなうようにすすめた、菊枝にはそれとべつに、良人の帰つて来る日まで、できるならひとの厄介にならないで、姑と自分の生計くらいは稼ぎたいと考えたのである。市左衛門は笑つて、「見るよりは骨のおれる仕事ですから」とはじめはあやぶんでいたが、菊枝のけんめいなようすと、眼にみえるほどの覚えのたしかさにだんだんと心を惹<sup>ひ</sup>かれ、あらためて腕のよい織り子につけて、本筋の仕事を教えて呉れるようになった。その年は花も見なかつた、朝は暗いうちに起きて、

姑と自分の食事をすませ、あとの始末をして機場へ出る、ひるに返つてふたりの昼餉ひるげをつくり、終るとすぐにまたひきかえしてゆく、夕暮れに帰つて、晩の食事をとり、そのあとを片付けると、解きものや縫いもの洗濯などのこまごました用事が待っている、夜なかにはきまつて姑の世話に二度ずつは起きなければならなかった。春の去つたのも、夏のゆくのも気づかずに暮した。

その後もときおり三郎兵衛からおとずれがあつた、いつもいどころがちがつていて、大阪からのこともあり紀伊からのこともあつた。三年めには四国から中国へわたり、長州までいってまた京へ戻つた。いつも母の安否をたずねるだけで、決しておのれのことは精くわしく書かなかつたが、ときおりの文字にそれとなく察しのつくことは、誰かの委託によつて諸国の産業のめようを視察しているように思える、それが当らないとしても、米沢藩と縁のつながっているらしいことは疑う余地がなかつた、「たしかになにかあるのだ……」菊枝はしだいにそう確信するようになった。「なにかしら世間に知れない真実があるのだ……」もしそれが事実だつたとすれば、ことによると良人は帰参がかなうかも知れぬ、そういう希望がいつかしら心を占めるようになり、菊枝の日常は少しずつ明るいほうへと向かつていった。

経つてみるとつきひほど早いものはなく、五年の星霜は夢のまにすぎで安永六年の秋を迎えた。四五日つづいてけづるような雨の降ったあと、にわかにか空が澄みあがつて、松林をわたる風もやや肌寒く感じられる一日、下野の宇都宮から音信があつて三郎兵衛の病臥を知らせて来た。手紙は宿の者が書いたので、五十日あまりまえからの病状と、今ではどうやら恢復期になつて案ずることもないという意味が精しくしたためであつた。菊枝は胸のふさがるおもいで読んだ、姑は聞き終つてからしばらくはか考えているようすだつたが、やがてしづかに盲いた面をあげ、

「おまえみとりにいつてあげてお呉れ」

と云つた、

「旅で病んではさぞ心ぼそいことでしょう、わたしはしばらくの辛抱です、いいからすぐにいつておあげ、おまえがいつても、もう意地を張るきづかいはないのだから……」

菊枝はあつと息をひいた、きわめてしぜんな姑の口ぶりには、自分を三郎兵衛の妻と認めていることがはつきりと示されている、あまりに思いがけないことだつた、それとも自分が意味をとりちがえて聞いたのであろうか、すぐには返辞もできない菊枝の昏乱した気持を、老母はそれと察したのであろうか、

「おまえおどろいておいでのようだね、わたしがおまえに気づかなかったとも思っておいでだったの……」

そう云つてほほと笑い、すぐに膝を正して、一句ずつ押えるようなしつかりとした調子で語りだした、

「もう云つてもよいでしょう、五年まえのあのときには、どうしてもあのようになければならなかつたのです。殿さまの新しい御政治を思いきつて行うためには、そのさまたげになる御老職がたを除かなければならない、けれど誰々が御新政については、そのさまたげそのさまたげをするかはつきりわかつていなかつた、そこで千坂さまは、まず御自分から御新政反対の中心になり、殿さまには不為ふための老臣がたをお纏まとめになつたのです」

そこまで聞いた時はじめて、菊枝はあのときの豆腐問答を思いだした、……：そうだったのか、ではあのにがりの役というのは千坂さまのことをさしていたのだ、やはり意味があったのだと思つた。

「あのとき千坂さまが中心にならなければ、根こそぎ邪魔は除けなかつたでしょう」と老母はつづけた、

「おかげであるように事ははつきりと始末がつき、新しい御政治はどしどしはかどつて



います、三郎兵衛がおまえを去ったのは、自分の身のうえがどうなるかを知っているため、おまえや、おまえの親御さま方に累を及ぼしたくないと考えたからでした、あれも、わたしも、心では泣きながら詫びていたのですよ」

でもと姑は云いかけてつと膝を寄せ、両手をそつとさし出した、そして菊枝が自分の手を添えると、それを犄ひしとにぎりしめながら云った、

「でもわたしは、ねえ菊枝どの、わたしは此処へ移るとすぐから、きつとあなたが来てお呉れだと思っていました」

「姑上さま」

「きつと来てお呉れだと、……わたしはあなたのお気性を知っていましたからね」

菊枝は堪りかねて姑の膝へすがりついた、老母は片手でその肩をしずかにかい撫なでてやった、すすりあげる菊枝の泣きごえに和して、裏の松林に蕭しょうしょう々々と秋風がわたっていた。

付記 三年のちの安永九年、千坂家には閉門のゆるしがさがり、与市清高には江戸家老の命がくだった。登野村三郎兵衛が帰参したのはいうまでもあるまい。



# 青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1943（昭和18）年5月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 日本婦道記

## 不断草

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>